

2023年12月10日（降臨節第2主日、B年）

牧師メッセージ

「福音の初め」

（マルコによる福音書1:1-8）

司祭ヨセフ太田信三

今日の福音は「神の子、イエス・キリストの福音の初め」とあるように、マルコによる福音書の始まりの箇所です。創世記と同じ「初め」という語り出しに、待望の福音が今、始まるという緊張感が漂います。

荒れ野に洗礼者ヨハネが現れようとするその時、天上では神がイエスに語りかけます。「見よ、わたしはあなたより先に使者を遣わし、あなたの道を準備させよう。」神はイエスにこのように語りかけ、行動の 때가来たことを告げます。こうして、「福音の初め」が神の主導によって起こされたのです。

洗礼者ヨハネが「悔い改め」を求めたのは、神による救いの時が今まさに訪れようとしているからです。だからこそ、彼は「悔い改め」ではなく、悔い改めの「洗礼」を求めました。聖書において、「悔い改め」という語には「転回する・振り向く」という意味が込められています。つまり、「悔い改め」とは、神に背を向けた生き方から離れ、神の方へと方向を変えることなのです。けれども、この方向転換は人の努力だけで出来ることではありません。神の心、神の思いがわたしたちの心に染み込むとき、悔い改めは起こるのです。そのためには、わたしたちの心が神の思いが染み込む状態になっていなければなりません。洗礼者ヨハネはそのためこそ、悔い改めの「洗礼」を求めました。人々の心を神の思いが染み込む状態にするために、水で洗礼を施すのです。こうして、「ヨハネのもとに来て、罪を告白し、ヨルダン川で彼から洗礼を受けた」人々は、自ら悔い改めに務めることを誓い、水で洗われることで、来るべき方をお迎えする心を備えました。その心で、来たるべき方から霊による洗礼を受けられる時、まことの悔い改めは起こることになるのです。

当時、神はイスラエルから遠ざかったと考えられていました。しかし、神は民を見捨てたものではありません。時の訪れを待っていたのです。イザヤ書42:14に以下のようにあります。

『わたしは決して声を立てず、／黙して、自分を抑えてきた。』

今、わたしは子を産む女のようにあえぎ／激しく息を吸い、また息を吐く。』

今、神は長い沈黙を破り、イエスによって再びイスラエルに霊を降し、決定的な救いをもたらそうとしています。神が歴史に介入し、救いのために行動を起こすのです。マルコ福音書が主イエスの洗礼に先立って洗礼者ヨハネの活動を伝えるのは、ヨハネ本人に興味があるからというよりもむしろ、ヨハネを通して働くこの神の姿を伝えるためなのです。

今、わたしたちは神が遠く離れてしまったように感じていないでしょうか。もしそうであったとしても、神によって起こされた出来事、イエス・キリストの福音は消えてなくなることはありません。この福音は、今も聖霊を通して実現していることであり、わたしたち自身に働いている現実です。降臨節第二主日、あらためて洗礼の恵みに立ち返り、神の思いが染み込む状態へと整えられますように。そうして耳を澄ますなら、福音が主イエスの足音と共に近づいてくるはずです。